

樹木と絵画の交差点

第9回 ～クリムトとブナ～



グスタフ・クリムト（1862-1918）といえば、金色のきらびやかな装飾を配した人物画が有名です。「アデーレ・ブロッホ＝パウアーの肖像Ⅰ」（左図）は、「黄金のアデーレ」、「オーストリアのモナ・リザ」とも呼ばれます。官能的な魅力を湛えたあでやかな女性像を多く描いたクリムトですが、あまり知られていないことに、秀逸な風景画をたくさん描いています。後年クリムトは、避暑で過ごしたオーストリア中西部の湖畔で、ブナなどの樹木や植物をモチーフにした風景画を描きました。人物画とは全く違った趣を見せるクリムトの風景画。そこにはどんな心情が映されているのでしょうか。

グスタフ・クリムト（1862-1918）

「アデーレ・ブロッホ＝パウアーの肖像Ⅰ」（1907年） オルセー美術館蔵

19世紀末のウィーンを象徴する画家。あでやかな女性を描き、金色を多用し装飾の技法を駆使した「黄金様式」で一世を風靡した。

安らぎの光景

若き日のクリムトは、弟と建築装飾会社を立ち上げてウィーン中の建築の装飾を手がけ、華麗で豪華な描写でたちまち装飾家としての頭角を現しました。評判が高まっていたクリムトは、ウィーン大学講堂天井画の仕事を受け、意欲的に取り組みます。しかしアカデミックな美術から逸脱した女性の裸体表現などが過激に受け取られて非難を浴び、クリムトは計画を放棄。数年にわたるやり取りで神経をすり減らし消耗する日々を送ります。その頃からクリムトは恋人の別荘があるオーストリア中西部アッター湖でたびたび避暑を過ごしています。湖畔で過ごす穏やかな時間は、騒々しい都市の生活の疲れを癒す日々だったでしょう。



正方形の構図が平面的な描写を際立たせて、描写的でありながら抽象的感覚もある画面です。落ち葉の黄色いタッチがリズムカルに配置されて、抽象と具象の中間の不思議な空間を生んでいます。水平線を上のほうに配置しているため、なだらかな傾斜が画面中に広がって、絵を見ているとブナ森の空間に包まれるように感じます。

ヨーロッパでは、ブナ林は平地にも広がっており、人々に身近な樹木です。生垣としてもよく使われています。

ブナの森Ⅰ（1902年） ドレスデン国立絵画館蔵



アッター湖畔のカンマー城 I
(1908年) プラハ国立美術館蔵

クリムトは避暑地での過ごし方をこう手紙に書いています。

「朝は…中略…たいいてい6時ごろに起きます。天気良ければ、近くの森に出かけ、太陽の下で針葉樹が少し混ざるブナの林を描きます。…中略…太陽が出ていれば湖畔の絵を、曇りの時は私の部屋の窓から眺めた風景を描きます。」

手紙には他にもボーリングや舟遊びをするクリムトの日常が記されています。風光明媚なアッター湖は、ロマン派の作曲家グスタフ・マーラーの作曲小屋があったことでも知られます。クリムトは当時まだ珍しかったモーターボートを所有して水上の遊びを楽しみ、ボートの上でも制作をしました(参照:「アッター湖畔のカンマー城 I」(左図))。「ウィーン大学講堂天井画」で世論と衝突し

疲弊した心身を、避暑地での休息で癒したクリムトは、ウィーンに戻ってから猛烈な勢いで仕事を再開しました。そしてその後、金地を用いた独自の「黄金様式」と言われる代表作を生み出しました。



森の中のブナの木 (1903年頃) 個人蔵

クリムトが朝の散歩中に会った光景でしょうか。ブナの巨木の幹と根元に着眼した大胆な構図の作品です。厚紙の上に習作的に描かれています。森の暗さと幹にさした木洩れ日の対比がブナの樹皮を浮き上がらせて、迫力ある効果を生んでいます。

クリムトには珍しく力強く荒々しい筆致で、ブナの樹皮の特徴の白い斑紋を表現しています。画面の真ん中に据えられた幹が人間の胴体にも見えるようです。クリムトの人物画の構成にも似た構図です。



ひまわり (1907年) 個人蔵

ヒマワリが中央に大きく配置され、そのかげにあふれるように咲く小さな花々が可憐です。ヒマワリの両脇の面に細かく繰り返されるタッチが星屑のようで、風景画を超えた深遠な宇宙空間も連想させます。「ひまわり」といえばゴッホの絵が有名ですが、ウィーンではゴッホ展が1906年にミートケ画廊において開催されたのを機会に、今まで無名だった画家ゴッホが本格的に紹介され、反響を呼びました。この画廊の経営者(宝石商パウル・バッハ)はクリムトの友人であったので、恐らくクリムトもゴッホ展を観ているでしょう。“ゴッホのひまわり”にインスピレーションを受けてこの作品が制作された可能性も考えられます。

ブナについて

ブナの仲間はユーラシアから北アメリカ大陸まで、世界各地に分布しています。ヨーロッパブナ (*Fagus sylvatica*)、コーカサスブナ (*Fagus orientalis*)、アメリカブナ (*Fagus grandifolia*)、タイワンブナ (*Fagus hayatae*) などの種類があります。クリムトが描いたブナは恐らくヨーロッパブナでしょう。ヨーロッパでは古くからブナと人間が共生してきた歴史があります。人間に限りない恩恵をもたらすブナは「森の母」、「森の女王」と呼ばれ、女性的なイメージを持たれています。ブナ材は燃料や家具の材、家畜の飼料など身近に利用されてきました。19世紀以降、観賞木として数多くの品種が作られています。



樹幹流



ブナ林

撮影場所：玉原高原（群馬県沼田市）撮影日：2017年8月15日

ブナは日本の植生を代表する落葉広葉樹です。ブナを中心とする森林は古くから人々の生活を支え文化を育む礎になりました。ブナの天然林が伐採された時期もありますが、現在、国土保全・生態系保全・景観保全の観点からもブナ・ブナ林の重要性が見直されています。ブナを中心とした森は水をため込み、「緑のダム」と言われます。雨が降った時は、雨水が葉、枝を通り幹を伝って根元へと流れ落ちます。この「樹幹流」という現象（写真・右上）が木の根元に水を貯える秘密です。こうしてブナは周囲の木々や動物、森全体に恵みをもたらすのです。

ブナの実（どんぐり）は生で食べられるため、クマやイノシシをはじめ森に棲む生き物たちにとって美味しい餌になります。夏から秋にかけてブナの実を求めてクマが山に集まり、最近ではクマが人里域にまで大量出没するようになりました。東北森林管理局では毎年ブナの実量をモニタリ

ングして、クマ出没の予測に役立て、警報を発表しています。ブナの実が「大凶作」の年は、クマの出没が増える危険があるとされます^{※注}。

※注
東北森林管理局では、クマの出没の増減に関わる要因はブナの豊凶だけではないため大量出没に絞って警報を出すべきとしている。

環境省刊行「ツキノワグマ出没予測マニュアル」環境省 ホームページ

<https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs5-4a/cause/index.html>（参照 2022-7-16）

《引用文献》

ズザンナ・バルチュ著 木村理恵子訳「グスタフ・クリムト 女たちを描いた画家」岩波書店 2009年（岩波アート・ライブラリー） p.59-60

《参考文献》

宮下誠「クリムト 金色の交響曲」小学館 2009年

キャサリン・ディーン、富田章訳「クリムト」西村書店 2002年（アート・ライブラリー）

ズザンナ・バルチュ、木村理恵子訳「グスタフ・クリムト 女たちを描いた画家」岩波書店 2009年（岩波アート・ライブラリー）

千足信幸「クリムト作品集」東京美術 2013年

「週刊 日本の樹木 01 ブナ 白神山地を歩く」学習研究社 2004年

大久保達弘編「ブナの絵本」農山漁村文化協会 2017年（まるごと発見!校庭の木・野山の木6）

《参考 URL》

酒井哲朗「村上槐多とエゴン・シーレ」三重県立美術館 ホームページ

<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/54447037523.htm>（参照 2022-7-16）